



## 「小さい歴史」と「大きな歴史」をつなぐ

成田 龍一(日本女子大学 名誉教授)

近現代の歴史を考える手だて—史資料として、新聞と雑誌が活用されるようになって久しい。新聞と雑誌の活用によって、歴史を論ずる精度がいきよに高まり、いまやその使用は当然のこととなっている。新聞・雑誌の復刻版の刊行が、その作法を後押ししている。しかし、このとき、扱われる雑誌は、復刻版を含め、もっぱら月刊誌が対象とされ、週刊誌には関心が及んでいない。

だが、周知のように、週刊誌の歴史は古い。先駆けをなしたのは、新聞社系の『週刊朝日』であり、1922年のことである。当初は、『旬刊朝日』として10日ごとに刊行していたが、すぐに週刊とされた。つづけて『サンデー毎日』も創刊されている。

週刊誌が歴史の史資料として出遅れたのは、週刊誌が「主張」よりは「情報」、個人の「論説」よりは「話題」の提供、直接の「政治」よりは「文化」による社会の把握をもっぱらとする編集方針によっていよう。グラビアや写真を多用する構成にも、歴史への接近材料として、ためらいがみられた。週刊誌は、国際関係や国際政治など「大きな出来事」に目を向け、真正面からの切りこみではなく、人物やエピソードなど「小さな出来事」からの接近を試みている。文章での伝達とともに、視覚によるグラビアを重視し、コラムという形態も多用している。

だが、この週刊誌の姿勢こそいまや示唆的であり、資料として活用すべき時であろう。たとえば、『週刊朝日』1946年1月6日号の目次を見たとき、「占領期」である

ことを前提としつつ、からめ手からの記事が目につく。写真を多用し「進駐軍」を紹介し、かれらのクリスマスを話題とし、「ヤミ市」から占領下の社会の様相を伝えている。あらためて週刊誌によって、「大きな歴史」と「小さな歴史」をつなぐことが可能になる。いまではすっかり忘れ去られてしまった「小さな出来事」を、占領という「大きな出来事」と結びつけ、人びとの「心性」に接近することができるのである。

20世紀末のグローバリゼーションのなかで、「歴史」に対する感覚が変化してきているなか、あらためて「大きな歴史」と「小さな歴史」を接合する週刊誌の役割と位置取りには、いま歴史を考える手掛かりが充ちている。

いまひとつ。かかる歴史の再考に際し、占領期の『週刊朝日』に焦点が当てられることも見逃せない。2020年代に入ってから、コロナ禍、そしてウクライナ侵攻という出来事によって、世界—社会がおおきく動いている。国際政治＝「大きな歴史」の次元では、第二次世界大戦後—冷戦の体制が、世相＝「小さな歴史」の次元では、「戦後」の社会と文化からの離脱が進行しているということである。＜いま＞の社会の基盤をなす時期＝占領期を「大きな歴史」と「小さな歴史」とをつなぎ合わせながら考える——このことが、＜いま＞の歴史的位相とともに、歴史を見る目を養っていくことは疑いない。『『週刊朝日』総目次・執筆者索引』の刊行を、歓迎したい。

### 本書の特徴

- 1 目次情報を採録するのではなく、雑誌のすべての頁に目を通し、それぞれの記事タイトルから入力。
- 2 戦後占領期に発行された『週刊朝日』北海道版に関する精緻な調査を行い詳細な情報を明らかに。
- 3 別冊のすべてを確認し、目次情報を収録 その多くが文芸特集 戦後文学の出発期における重要な作品が数多く掲載 初出記録を整理 この時期の作家たちの営みがより鮮明に。
- 4 「総目次」に加えて、各年の特徴的な記事の紹介する「解説」本書を活用した実践例としての「コラム」を挿入。「解説」と「コラム」は、文化表象をどのようなかたちで研究へとつなげていくことができるか、という観点からの実例報告となっている。

